クワガタの木の下で

心優しきライダーに捧げる

柳瀬川ひろし

父さん、夕べまたコクワが飛んで来たよと裕樹が手を拡げると、血だまりの中にコクワガタのメスが肢を折り畳んでじっとしているのが分かった。

ヒラタクワガタじゃないのかとわざと疑うような口ぶりで返事をした。裕樹はフルフェイスのシールドを下したまま手の平のクワガタを引っ繰り返すと、前肢の頚節を見てよ、湾曲してないでしょ、真っ直ぐな感じで、それに艶もあまりないしね、とよどみなく答えた。

クワガタは肢を伸ばし、血だまりをしばらくもがいた後、裕樹の親指に到達すると上翅をゆっくり開いて持ち上げた。どこか遠くを見るような目だ。カシャカシャと折り畳まれた下翅が大きな翼に変化する音が聴こえコクワガタは羽ばたいた。覗き込んでいた私の顔に血液の飛沫が跳ねる。

わたしは思わずあっと声を漏らす。右手でコクワガタを追いかけたが虚空を掴んだに過ぎなかった。クワガタは辺りを真っ赤に染めながら飛び去ってゆく。いいのか裕樹、とヘルメットを叩いたが、いいんだよ、父さん、と優しい声が返ってきた。

「わたしはグラップルクレーン付きの大型運搬車で、切り出された原木を大豊の製材所に運ぶ途中でした」

　運転手の清遠は節くれ立った大きな手を労わるかのように摩りながら事故の様子を聞かせてくれた。彼の深い悲しみを湛えた眼差しは、わたしに向けられてはいるもののわたしを見てはいなかった。救えるはずだった眼前の命に手を差し伸べることができなかった悔恨の念が、彼をあの時、あの場所に縛り付けているように思えた。
「息子さんは笑っていたようでした」
　スモークシールドを下したフルフェイスのヘルメットでは表情なんて分からなかったのではないですかと追及しても、笑っていたか微笑んでいたんだと思いますという答えが返ってくるばかりだった。さらに清遠はこんなことも言った。
　「息子さんはバイクと一体となってコーナーに突っ込んできました。速度調整は十分だったと思います。ちょうどバイクを倒し込むところが見えたんですが、ああ、うまいバイク乗りだなって思ったんです。だけど、コーナリングの途中でねえ」
　清遠は少し頬を緩めて自分に言い聞かすように頷いた。
「バイクがきれいにバンクして、大型バイクなのにスムースなコーナリングだなって見惚れてたんです。いやね、わたしもバイクに乗るから分かるんですよ。しかし、途中から目線がセンターラインよりの一点に釘付けになったみたいで、先に送られなかった。いや、目線というかヘルメットはコーナーの出口を向いていたんだけど、途中から視線がセンターライン辺りを見ているように感じたんです。わたしは思わずアクセルを緩めました。そして、バイクの成り行きを見てしまいました。

　バイクはわたしの車の方へ膨らんできて、そのとき見たんですよ、息子さんが笑っているのを」
　清遠は上半身を左に傾け、節くれ立った大きな右手の親指と中指とでこめかみを押さえ、じっと痛みに耐えているようだった。
「バイクが僅かに車体に触れた衝撃がありましたので、やっとブレーキを踏むことができました。サイドミラーに転がって滑ってゆくバイクと息子さんの姿が映りましたが、そりゃあ静かでした。最後にドンッという崖に激突する音が聞こえただけでね。わたしは車を路肩に寄せ大急ぎでバイクの処に走りました」
　わたしは息子によく語って聞かせたものだ。大学１年のとき、部活の先輩に夢中になり四六時中彼女のことを考えている時期があった。考えごとをしながら進入した交差点で対向の右折車両に気付かず接触事故を起こし、バイクとともに横滑りしながら角のガソリンスタンドに突っ込み、柱に当たって止まった。フルフェイスのおかげで頭部は守られ、怪我は擦過傷だけだった。だからヘルメットだけはフルフェイスにしろと。
「息子さんは長座姿勢で居眠りしているようでした。どこにも出血はなくてね。わたしはすぐにケータイで救急車を呼び、息子さんに話しかけましたが、返事はありませんでした。これは動かさない方がいいと思ってね。それでわたしは事故現場を見に行ったんです。タイヤが砂利かオイルで滑ったんじゃないかと思ってね。でも路面はきれいでブレーキ痕すら見付かりませんでした。ただ、虫がいましたよ。小さい虫がね。

あれはクワガタでした。ちょこちょこ歩いてましたよ」

父さん、コクワガタってすごいよね。今でもあの河原のコナラの木にいるんだよと、高校３年生だというのに裕樹は自転車で帰ってくるなり嬉しそうに話しかけてきた。そこは裕樹が３歳の頃から夏になるとよく連れて行ったクワガタ捕りのお気に入りの場所だった。

ぼくの子どもの頃はノコギリクワガタもミヤマクワガタもヒラタクワガタも時々はいたよね。でも近頃はすっかりいなくなって、今の子どもたちは、クワガタはペットショップで買うものだと思ってるよ。だけどコクワガタは立派だよ。今でもちゃんと身近な処に生息しているんだからねと、コクワガタについて一気に話すと、他の場所も見てくるよと、また自転車で飛び出して行ったことがあった。

わたしもちょうど仕事が一段落していたので、後から追いかけた。

久しぶりに登った後山は昔からみかんの山だった。しかし、道路から少し登った道脇にカシやコナラの木が並んでいる。見ると昔と変わらず樹液が出ている。が、虫は付いていない。裕樹が観察した後なのだろう。

おそらく裕樹はこの上の墓地にあるクヌギの木を見に行っているに違いない。

墓地はシイやカシなどの雑木で覆われていた。西側の隅に雑木に隠れるように立っている一本のクヌギがあった。木漏れ日が射すその一角に、やはり裕樹はいた。

木漏れ日を浴びた裕樹は、そこら中の落ち葉と一体となって一本の木と化していた。まるで自らの樹液をクワガタに与えるかのように。裕樹にはクワガタを愛でる喜びの表情が張り付いていた。わたしは静かに近付くと裕樹の後ろに回り込み視線の先を見た。

そこには一匹のオスと二匹のメスがいた。いずれもコクワガタだ。オスは体長５センチはあろうかと思われる大物だ。大アゴには普通に見られる内歯以外に、先端部にも一対の内歯が確認できた。

コクワガタは音に反能して身を固め樹上から落ちてくることがある。樹液を吸っている様子をもうしばらく見ていたかったわたしたちは、クワガタ以上に四肢を固くしてじっとかれらを見詰めていた。

父さん、やっぱりコクワはすごいよね。自然環境も悪くなっているはずなのに、まだこんな大物がいるんだよと裕樹は自分を自慢するかのように囁いた。わたしが静かに頷いたそのとき、かれらはパラパラッと前後して落ち葉の上に落下してきた。

わたしは裕樹の事故に抱いてきたもやもやした部分がはっきりと見えてきた気がした。それがおそらく真実に近いのではないかと思った。

清遠はクワガタのことを思い出しているようだった。
「今朝、山で原木を積み込む前、いい松の立ち枯れを見付けましてね。材として使えないかと思い切ってみたんですよ。根元は一部朽木になってたんですが、その中にクワガタがいてね。珍しいこともあるもんだ、松の樹液を吸うわけでもないのに、松の木にクワガタがいるなんてとね。あれはコクワガタでしたね。小さな大アゴを折り畳むようにして身を固めていたんです。その同じ日に、また事故現場でクワガタを見るとはね」
清遠の話に耳を傾けながらわたしは路上のクワガタはコクワガタだったろうと確信した。
裕樹には特別な能力と言ってよいのか、人にはあまりない能力があった。それは走行中の車の中から路上にいる小さな昆虫を発見する力だ。これまでにもドライブ中に、父さん、車止めてと何度か停止を余儀なくさせられることがあった。そのたびに車外に出た裕樹はカブトムシやクワガタムシを捕まえて嬉しそうに戻ってくるのだった。
父さん、もうちょっとでぺっちゃんこにするところだったよと笑顔で報告する裕樹のことを、本当に虫好きなんだなとわたしは感心して見たものだった。
裕樹はコーナリング中に路上のクワガタに気付いたのだ。裕樹の目はそれがコクワであることまでも判断していたかもしれない。重い原木を載せた対向車がアンダーステア気味の傾向を見せてコースアウトすることを恐れ、運転手がイン気味にハンドルを切って進行してくるだろうと予想しつつ、ちょこちょこ歩いて

いるコクワの安全が気になって仕方なかったろう。

　裕樹、コクワは無事だったよ。お前がセンターライン寄りに膨らんだ分、トラックは無意識のうちに路肩の方に逃げたのだと思う。だからコクワは救われた。

　裕樹が逝ってしまってから、すでに７年の歳月が流れた。けれど、裕樹の夢は今でもよく見る。夢は恐ろしい情景を映し出しているにも関わらず、裕樹はいつも穏やかに微笑んでおり、わたしはなぜか温かい気持ちになる。
　わたしは夏が来るたびに裕樹のお気に入りだったクワガタの木を訪れる。今年もはや５匹のコクワを確認した。クワガタの木の前に佇んでいると、いつでも裕樹の優しい声が頭上から降ってくる。